

捕鯨を文化として、鯨と人との関係を見つめ直す機会に

長門 Cultural Exposure Meeting

鯨文化へのいざない

— W C 国際捕鯨委員会出席の

外国関係者を長門市に招待

第54回国際捕鯨委員会に出席している外国の関係者を招待し、長門市の鯨にまつわる伝統文化を紹介する「鯨文化へのいざない」を5月11日（土）に開催しました。各国の文化・伝統における捕鯨の役割について意見交換を行い、捕鯨に対する理解と国際交流を深めました。

この日は、アイスランドやノルウェーなどの捕鯨容認国を中心に、13カ国から21人の各国政府代表団や非政府組織（NGO）のメンバーなど、国際捕鯨委員会の関係者38人が参加しました。

一行は午前中、古式捕鯨の伝統が今も息づく通地区を訪れ、向岸寺で鯨回向（えこう）に参列したり、国指定の重要文化財早川家住宅やくじら資料館、鯨墓を熱心に見学し、通地区の人たちと交流を深めました。

また、午後からは中央公民館で開かれた「鯨文化へのいざない」会議に出席し、捕鯨に関する各国の伝統文化や役割について熱心に意見を交換しました。

一行が最初に訪れた向岸寺では、三百年以上も続く、鯨の霊

を慰める伝統行事「鯨回向」に

参列し、地元の人たちに交じって鯨の位牌が安置された仏前に焼香しました。鯨の戒名や種類などを記録し同寺に大切に保管されている「鯨鯨過去帳（げいげいかこちょう）」について、同寺関係者から説明を受け熱心に

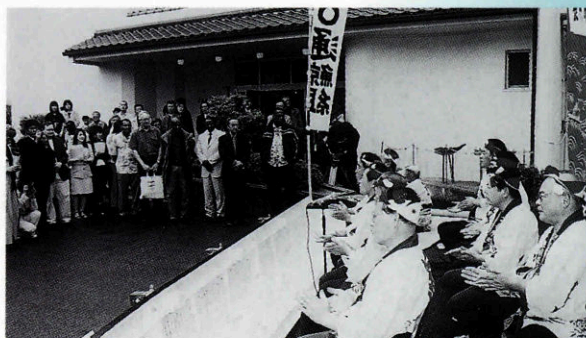


向岸寺の「鯨鯨過去帳」に見入る参加者たち

見学していました。一度に大勢

の外国人が訪れるのは同寺の長い歴史の中でも初めてのことで、参列した人々も大勢の外国人と詰めかけた報道陣に驚いていました。檀家の一人は「鯨回向は通の人たちの優しい気持ちの表れです。その気持ちを少しでも感じてもらえれば」と話していました。また、参加者のアイスランドで捕鯨会社を経営しているクリスチャン・ロフトソンさんは「鯨を獲らなくなった今でも、三百年以上も続く鯨回向の伝統に感動しました」と話していました。

くじら資料館では、通鯨唄保存会が「祝え目出度」などの鯨唄で歓迎し、胸の前で両手をすり合わせる「もみ手」の意味を



くじら資料館前で通鯨唄保存会の鯨唄で歓迎を受ける一行

質問する参加者の姿も見られました。

捕獲した母鯨から出てきた胎児を吊った国指定の史跡「鯨墓」では、参加者から「鯨の墓は大変興味深い」、「鯨を敬う優しい気持ちを感じた」といった感想が聞かれました。



鯨墓の説明に興味を持つ参加者